

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 6 月 16 日現在

機関番号：23701

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25350845

研究課題名(和文)セルフメディケーション推進のための包括的医薬品教育プログラムの構築

研究課題名(英文)Development of a comprehensive drug education program to promote self-medication

研究代表者

寺町 ひとみ (TERAMACHI, HITOMI)

岐阜薬科大学・薬学部・教授

研究者番号：20405129

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：セルフメディケーション推進を目的とした「医薬品の正しい使い方」が定着するためには、学校・家庭・薬剤師の連携による包括的医薬品教育プログラムを構築する必要がある。そこで、平成24年度から開始となった中学校保健体育科「医薬品の正しい使い方」授業の実施状況を調査した。中学校保健体育科の「医薬品に関する授業」を受講した高校生を対象に医薬品に関する知識・意識の現状を明らかにするために調査を行った。岐阜市内の小・中学校の児童・生徒を対象に医薬品に関する知識・意識の現状を明らかにするために調査を行った(定点調査)。以上を踏まえて、学校・家庭・薬剤師の連携のもと包括的医薬品教育プログラムを構築し公開した。

研究成果の概要(英文)：In order for the self-medication program, "Correct use of medicine" to become well established, we need to build a comprehensive drug education program involving collaboration between schools, families, and pharmacists. To this end, we surveyed the implementation of "Correct use of medicine" lessons, which were incorporated into the middle school health and physical education curriculum in academic year 2012. The survey aimed to determine the current knowledge and awareness surrounding medication of high school students who had taken the "Correct use of medicine" lessons in middle school since academic year 2012. We also conducted a survey to determine the current knowledge and awareness surrounding medication of primary and middle school students in Gifu City (fixed point observation). Based on the results of the above survey, we expanded our comprehensive drug education program in collaboration with schools, families, and pharmacists.

研究分野：総合領域

キーワード：保健健康管理 医薬品の正しい使い方 セルフメディケーション

### 1. 研究開始当初の背景

世界保健機構(WHO)は、平成12年に「セルフメディケーションとは自分自身の健康に責任を持ち、軽度な身体の不調は自分で手当てすること」とし医薬品使用についてガイドラインを示した。厚生労働省は、平成14年度にセルフメディケーションにおける一般用医薬品のあり方について、国民が自己の健康管理を自己責任のもとですすめ、医薬品の正しい使い方についても正しい知識と理解をもつことが求められていることを中間報告書としてまとめた。その後、文部科学省においても専門部会等による審議がなされ、平成20年3月に改訂された新学習指導要領では、医薬品に関する内容が中学校保健体育科保健分野に盛り込まれるとともに、体系化が図られ、「健康な生活と疾病の予防」の内容の中で、「喫煙、飲酒、薬物乱用と健康」とは別に、「保健・医療機関や医薬品の活用」として扱うこととされた。具体的には「健康の保持増進や疾病の予防には、保健・医療機関を有効に利用することがあること。また、医薬品は正しく使用すること。」と盛り込まれ、平成24年度から中学校の保健体育で「医薬品の正しい使い方」が導入された。これまで、日本では「医薬品」に関する指導は、特別活動などの時間で保健指導の一環として行われてきた。養護教諭あるいは学校薬剤師の参加による授業が実施されているところも見受けられるが、平成23年度まで体系的な授業が行われてこなかった。一方、財団法人日本学校保健会が、昭和61年から「喫煙・飲酒・薬物乱用防止に関する指導の手引きや指導書」、「薬物乱用防止教室マニュアル」を作成改訂し、教員による薬物乱用防止教育への進め方を提示してきた。「医薬品の正しい使い方に関する指導方法検討委員会(委員長は勝野真吾で共同研究者、寺町は平成21年より委員)」が中心となって「医薬品の正しい使い方」について小・中・高校生用・指導者用解説を作成した。平成21年4月施行の「学校保健安全法」では学校三師による保健指導が新たに盛り込まれた。このような背景のもと、これまでに、申請者は、保健体育科教員(あるいは養護教諭)と学校薬剤師の協力による中学校保健体育科「医薬品の正しい使い方」教育プログラムを開発し公開した([http://www.gifu-pu.ac.jp/lab/byouin/zissen\\_yaku\\_HP/index\\_byouyaku\\_.html](http://www.gifu-pu.ac.jp/lab/byouin/zissen_yaku_HP/index_byouyaku_.html)・第45回日本薬剤師会学術大会(浜松)で発表)。この教育効果を継続的に定着するためには、保護者および地域住民によるサポートが不可欠である。しかし、保護者および地域住民はこれまでに「医薬品の正しい使い方」教育は受けていないので、適切なサポートをすることが困難である。一方、我が国では薬事法の改正により一般用医薬品を誰でも容易に手に入れることができるようになったことから、早急に、国民全体に「医薬品の正しい使い方」に関する教育の実施が望まれる。欧米では、

若者たちの薬物乱用が社会的問題となり、健全な学校保健衛生の向上の一環として「くすり教育」は、単なる医薬品に限定されず、医薬品(一般用医薬品、処方薬を含む)、アルコール飲料、タバコ、覚せい剤、麻薬、シンナーなど全てが含まれている。米国ミネソタ大学における包括的健康教育プログラム(Project Northland: 学校・家庭・地域の連携による青少年の飲酒防止などに関する大規模介入研究)により、飲酒率の低下の成果が報告されている。

### 2. 研究の目的

このような状況の中で、セルフメディケーション推進を目的とした「医薬品の正しい使い方」が定着するためには、学校・家庭・薬剤師の連携による包括的医薬品教育プログラムを構築する必要がある。そこで、申請者は、平成24年度から開始となった中学校保健体育科「医薬品の正しい使い方」授業の実施状況を調査し、続いて、学校・家庭・薬剤師の連携のもと包括的医薬品教育プログラムを構築することを企画した。

### 3. 研究の方法

平成25年度:

- (1) 中学校保健体育科「医薬品の正しい使い方」授業の実施状況等に関する調査: 全国から無作為に抽出した中学校に対して「医薬品の正しい使い方」授業の実施状況および生徒の意識について調査を行う。
- (2) 学校・家庭・薬剤師の連携による包括的医薬品教育プログラムの開発および評価手段の開発: 中学校保健体育科「医薬品の正しい使い方」教育プログラムをサポートしつつ、同時に保護者に対する「医薬品の正しい使い方」講演会、生徒・保護者を含めた地域住民に対する「医薬品の正しい使い方」啓発普及イベントプログラムを企画し、その教育プログラムの評価手段を開発する。

平成26年度:

- (3) 指導者養成ワークショップの開催: 岐阜県下の中学校保健体育科教員・養護教諭および薬剤師(学校薬剤師を含む)合同の「医薬品の正しい使い方」教育に関するワークショップを開催し、その前後にアンケート調査を実施する。
- (4) 学校・家庭・薬剤師の連携による包括的医薬品教育プログラムの実施と短期的評価: 開発した包括的医薬品教育プログラムを岐阜県下の中学校および校区の保護者および地域住民を対象に実施し、医薬品に関する知識、態度、行動に及ぼす短期的効果について評価する。

平成27年度:

- (5) 学校・家庭・薬剤師の連携による包括的医薬品教育プログラムの改良: (4)の短期的効果から包括的教育プログラムを改良する。

(6)学校・家庭・薬剤師の連携による包括的医薬品教育プログラムの公開：ホームページ上で包括的医薬品教育プログラムを公開する。成果についてまとめて学会で発表し、論文として公表する。

#### 4. 研究成果

予備的な調査：セルフメディケーションの認識についての予備的な調査が必要と考え、「一般用医薬品のインターネット販売に対する薬学生の意識調査」を行った。

##### (1) 全国：中学校保健体育科「医薬品の正しい使い方」授業の実施状況等に関する調査

全国の公立中学校 9784 校（2014 年全国学校総覧 2014 年版原書房）の 1 割の約 1000 校を対象とし、各都道府県の公立中学校から無作為に 1091 校を抽出した。ただし、各都道府県、最低でも 10 校は抽出した。調査は平成 26 年 10 月～平成 26 年 12 月に行い、524 校から回答を得た（回収率 48.0%）。アンケートの回答者は養護教諭が 52.3%と最も多く、次いで、保健体育科教員が 39.3%であった。保健体育科の授業で「医薬品についての授業」を担当している教員・講師では、保健体育科教員が 91.8%と一番多かった。養護教諭が 6.3%、学校薬剤師が 8.4%と少なかった。その他では、外部講師が 0.6%（3 人）、教頭が 0.2%（1 人）であった。保健体育科教員のみでは 83.4%と多く、保健体育科教員と学校薬剤師では 5.9%と少なかった。無回答が 4.4%あった。授業時間は、平均 49.6 分（10 分から 90 分）で、授業回数は平均 1.2 回（0.5 回から 5 回）であった。50 分が 80.5%で、1 回が 72.3%と最も多かった。その他の回答では、保健等の授業で少し触れる程度が 1.7%、薬物乱用防止等で触れる程度が 1.3%、実施していないが 1.0%であった。授業で使用している教材については、教科書が 84.9%と最も多く、パンフレット冊子類が 13.5%、インターネットからのダウンロード資料が 15.6%であった。また、その他の回答では、教員が作成した資料が 1.5%、薬剤師など外部講師が作成した資料が 2.5%、保健の補助教材が 1.5%であった。

一方、保健体育科の授業以外で「医薬品についての授業」を行っているとは回答したのは、17.6%と少なかった。総合的な学習の時間および学校行事がそれぞれ 30.4%と多く、学級（ホームルーム）活動が 20.7%であった。その他の回答では、薬物乱用防止教育が 4.3%、薬学講座が 3.3%、学年集会在が 3.3%であった。教員あるいは講師では、学校薬剤師が 62.0%と一番多く、養護教諭が 21.7%であった。保健体育科教員は 5.4%と少なかった。また、その他の回答では、警察官が 10.9%、外部講師が 7.6%であった。

以上より、保健体育科の「医薬品についての授業」は、ほとんどの中学校では 50 分 1 回で保健体育科教員が担当しており、学校薬剤師の協力が少ないことがわかった。また、薬物乱用防止等の授業の中で「医薬品につい

ての授業」を実施している、また、「医薬品についての授業」を実施していないことも明らかとなった。今後、「医薬品に関する教育」の位置づけについての啓蒙および専門家である学校薬剤師等の活用方法について、中学校の管理職および保健体育科教員を対象にした研修会や講演会等を企画していく必要がある。

(2) 岐阜県：中学校保健体育科「医薬品の正しい使い方」授業の実施状況等に関する調査  
岐阜県の全中学校 184 校を対象に平成 26 年 10 月～平成 26 年 12 月に調査した。回収率は、岐阜県全体では 60.9%（112/184）であった。岐阜市の回収率は 90.9%（20/22）と高かった。アンケートの回答者は岐阜県では保健体育科教員が 47.3%、養護教諭が 45.5%であった。岐阜市では、保健体育科教員が 85.0%と多く、養護教諭は 25.0%であった。

各質問については全国調査と同様な結果であった。

##### (3) 岐阜県の児童生徒における「医薬品について」のアンケート調査結果

岐阜市の小学校 6 年生および中学校 2 年生の児童・生徒、岐阜県内の高校 1 年生の生徒を対象にした「医薬品の正しい使い方」に関する知識・意識調査を行った。小学校は岐阜市の 47 校 6 年生 1 クラス全員の児童を対象にした。中学校は同意が得られた岐阜市の 21 校 2 年生 2 クラス全員の生徒を対象にした。高校は同意が得られた岐阜県 38 校 1 年生 1 クラス全員の生徒を対象にした。調査は平成 26 年 10 月～平成 26 年 12 月に実施した。

表 1 回収率及び有効回答率

	配布人数 (人)	回収人数 (人)	回収率 (%)	有効回答 数(人)	有効回答 率(%)
小学校	1432	1426	99.6	1424	99.9
中学校	1433	1412	98.5	1398	99.0
高校	1407	1403	99.7	1399	99.7

体調不良時の対処において、多くの小学生が家族に相談するに対して、多くの中学生・高校生が早めに寝ると回答しており、成長に応じた変化が見られた。また、医薬品の使用時には、多くの小学生、中学生、高校生いずれも両親・祖父母に相談することがわかった。医薬品の使用目的では、多くの小学生、中学生、高校生いずれもかぜ、発熱に対して医薬品を使用していることがわかった。自己判断による購入経験、友人からの譲り受け経験、譲渡経験はわずかではあるが「ある」の回答があり、特に、女子高校生が多かった。

高校 1 年生において、学校での医薬品に関する授業経験について「ある」が 31.0%に対して、「わからない」が 48.0%と多く、「ない」が 19.5%であった。「ある」と回答した生徒では、医薬品の譲り受けおよび譲渡の経験が低く、医薬品の用語の認知度および知識の理解度が高いことが明らかとなった。

表2 自己判断による購入経験

(%)	ある	ない	無回答
小学生	3.3	96.3	0.4
男	3.9	95.5	0.6
女	2.7	97.2	0.1
中学生	9.2	90.5	0.2
男	9.5	90.0	0.4
女	8.9	91.1	0.0
高校生	14.4	85.4	0.1
男	13.6	86.3	0.2
女	15.1	84.8	0.1

表3 友人からの譲り受け経験

(%)	ある	ない	無回答
小学生	6.5	93.1	0.4
男	5.2	94.1	0.7
女	7.8	92.2	0.0
中学生	8.7	91.1	0.1
男	6.9	92.8	0.3
女	10.7	89.3	0.0
高校生	21.4	78.6	0.1
男	8.2	91.6	0.2
女	31.2	68.8	0.0

表4 友人への譲渡経験

(%)	ある	ない	無回答
小学生	6.2	93.2	0.6
男	4.9	94.1	1.0
女	7.5	92.4	0.1
中学生	8.7	91.1	0.2
男	6.2	93.4	0.4
女	11.2	88.8	0.0
高校生	21.3	78.6	0.1
男	9.4	90.5	0.2
女	30.2	69.8	0.0

今後、学校での「医薬品に関する授業」が効果的に実施されるよう大学の立場から情報提供およびアプローチをしていきたい。

(4) 学校・家庭・薬剤師の連携による包括的医薬品教育プログラムの開発および評価手段の開発  
 中学校保健体育科「医薬品の正しい使い方」教育プログラムをサポートし、保護者に対する「医薬品の正しい使い方」講演会、生徒・保護者を含めた地域住民に対する「医薬品の正しい使い方」啓発普及イベントプログラムを企画し、その教育プログラムの評価手段を開発した(図1)。  
 岐阜薬科大学で開催している大学祭を活用して、「薬の正しい使い方」プロジェク

トとして、大学祭における包括的医薬品教育プログラムを開発した。大学祭実行委員が中心となって企画、運営した点において、将来の薬剤師像を見据えた取り組みとして高く評価できる。また、2つの実験を取り入れたことにより、より一層興味深い内容として高い評価につながった。また、講義後のアンケート結果から「医薬品の正しい使い方」に関する知識および意識が向上したことが明らかとなった。

(5) 指導者養成講習会での講演

日本学校保健会主催の「自信をもって取り組める医薬品の教育」の研修会にて講演した(平成26年11月17日岐阜県羽島、平成28年1月21日神戸)。

(6) 学校・家庭・薬剤師の連携による包括的医薬品教育プログラムの実施と短期的評価

開発した包括的医薬品教育プログラムを岐阜県下の中学校および校区の保護者および地域住民を対象に実施し、医薬品に関する知識、態度、行動に及ぼす短期的効果について評価した。

(7) 学校・家庭・薬剤師の連携による包括的医薬品教育プログラムの改良

(8) 改良した「学校・家庭・薬剤師の連携による包括的医薬品教育プログラム」をホームページに公開し、成果について学会で発表し論文を公表した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計8件)

寺町ひとみ, 館知也, 齊藤康介, 江崎宏樹, 加藤未紗, 臼井一将, 野口義紘, 勝野眞吾, 岐阜県の中学校における「医薬品に関する教育」の指導実態調査, 日本医薬品情報学, 18, 2016, 印刷中, 査読有

寺町ひとみ, 館知也, 齊藤康介, 江崎宏樹, 加藤未紗, 臼井一将, 野口義紘, 勝野眞吾, 岐阜県における高校生の医薬品に関する知識・意識の実態調査, 医療薬学, 42, 193-201, 2016. 査読有

野口義紘, 寺町ひとみ, 浅野祥子, 臼井一将, 加藤未紗, 横井貴文, 館知也, 酒井英二, 勝野眞吾, 一般用医薬品のインターネット販売における薬学生の意識調査, 岐阜県病院薬剤会雑誌「ぎふ病薬」, 59, 10-14, 2016. 査読無

寺町ひとみ, 齊藤康介, 江崎宏樹, 加藤未紗, 臼井一将, 野口義紘, 館知也, 勝野眞吾, 全国の中学校における「医薬品に関する教育」の指導実態調査, 医療薬学, 41, 870-879, 2015. 査読有

館知也, 浅野祥子, 後藤千寿, 吉田達彦, 臼井一将, 加藤未紗, 横井貴文, 野口義紘, 田中和秀, 安田昌宏, 水井貴詞, 寺町ひとみ, 一般用医薬品およびサプリメントの購入時におけるお薬手帳の利用意識向上を目指した集団指導の効果, 医療薬学, 41, 113-120,

2015. 査読有

館知也, 田中和秀, 浅野祥子, 横井貴文, 臼井一将, 加藤未紗, 野口義紘, 大澤友裕, 市橋厚司, 安田昌宏, 水井貴詞, 後藤千寿, 寺町ひとみ, OTC 薬・健康食品等購入時におけるお薬手帳利用を目指した退院時患者教育の効果 - ランダム化比較試験 -, 医療薬学, 40, 632-642, 2014. 査読有

寺町ひとみ, 中学校保健体育科「医薬品の正しい使い方」授業プログラムの構築, YAKUGAKU ZASSHI, 133, 1325-1334, 2013. 査読有

勝野眞吾, 寺町ひとみ, セルフメディケーション推進のための薬教育-現状及び薬学の使命-, YAKUGAKU ZASSHI, 133, 1307-1307, 2013. 査読有

〔学会発表〕(計 8 件)

寺町ひとみ, 江崎宏樹, 館知也, 齊藤康介, 加藤未紗, 臼井一将, 野口義紘, 勝野眞吾, 全国の中学校における「医薬品に関する教育」の指導実態調査, 日本薬学会第 136 年会(横浜), 3月 26-29日, 2016.

寺町ひとみ, 齊藤康介, 館知也, 江崎宏樹, 加藤未紗, 臼井一将, 野口義紘, 勝野眞吾, 岐阜県における高校生の医薬品に関する知識・意識の実態調査, 日本薬学会第 136 年会(横浜), 3月 26-29日, 2016.

Hitomi Teramachi, Kousuke Saito, Hiroki Esaki, Misa Kato, Kazumasa Usui, Yoshihiro Noguchi, Tomoya Tachi, Shingo Katsuno, Questionnaire survey of implementation status of "education for medicines" at junior high school, The 15th Asian Conference on Clinical Pharmacy (Bangkok, Thailand), June 23-26, 2015.

浅野祥子, 館知也, 吉田達彦, 横井貴文, 加藤未紗, 臼井一将, 野口義紘, 水井貴詞, 後藤千寿, 寺町ひとみ, 医療用医薬品、一般用医薬品およびサプリメントでのお薬手帳利用に対する意識, 第 24 回日本医療薬学会年会(名古屋), 9月 27-28日, 2014.

江崎宏樹, 野口義紘, 浅野祥子, 横井貴文, 臼井一将, 加藤未紗, 齊藤康介, 館知也, 寺町ひとみ, JADER を用いたスイッチ OTC 化した抗アレルギー薬の有害事象の解析, 第 24 回日本医療薬学会年会(名古屋), 9月 27-28日, 2014.

館知也, 浅野祥子, 田中和秀, 臼井一将, 加藤未紗, 横井貴文, 野口義紘, 大澤友裕, 市橋厚司, 安田昌宏, 水井貴詞, 後藤千寿, 寺町ひとみ, 一般用医薬品・健康食品購入時におけるお薬手帳の自発的利用をめざした退院時患者教育の効果, 医療薬学フォーラム 2014・第 22 回クリニカルファーマシーシンポジウム(東京), 6月 28-29日, 2014.

寺町ひとみ, 香田由美, 寺田幸広, 高橋竜也, 館知也, 土屋照雄, 勝野眞吾, 岐阜市の小・中学校の指導者に対する「医薬品に関する

教育」についての意識調査, 第 23 回日本医療薬学会年会(仙台), 9月 21-22日, 2013.

野口義紘, 寺町ひとみ, 高橋竜也, 浅野祥子, 臼井一将, 加藤未紗, 横井貴文, 館知也, 酒井英二, 勝野眞吾, 一般用医薬品のインターネット販売に対する薬学生の意識調査, 日本薬学会第 134 年会(熊本), 3月 27-30日, 2014.

〔図書〕(計 1 件)

寺町ひとみ, 「セルフメディケーション推進のための包括的医薬品教育プログラムの構築」(東海電子印刷株式会社), 2016.

〔その他〕

岐阜薬科大学病院薬学研究室ホームページ アンケート調査

[http://sv1.gifu-pu.ac.jp/lab/byouin/zis\\_senyaku\\_HP/kusuri-kyouiku1.html](http://sv1.gifu-pu.ac.jp/lab/byouin/zis_senyaku_HP/kusuri-kyouiku1.html)

包括的医薬品教育プログラム

[http://sv1.gifu-pu.ac.jp/lab/byouin/zis\\_senyaku\\_HP/kusuri-kyouikuproject.html](http://sv1.gifu-pu.ac.jp/lab/byouin/zis_senyaku_HP/kusuri-kyouikuproject.html)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

寺町 ひとみ (TERAMACHI HITOMI)

岐阜薬科大学病院薬学研究室・教授

研究者番号: 20405129

### (2) 研究分担者

勝野 眞吾 (KATSUNO SHINGO)

岐阜薬科大学・名誉教授

研究者番号: 70098523

館 知也 (TACHI TOMOYA)

岐阜薬科大学病院薬学研究室・講師

研究者番号: 80618447

### (3) 連携研究者

高橋 浩之 (TAKAHASHI HIROYUKI)

千葉大学・教育学部・教授

研究者番号: 20197172

様式 C - 19、F - 19、Z - 19 (共通)

時間	学習内容・学習活動	教員の指導・評価	資料
導入 10分	<p><b>自己紹介</b></p> <p><b>1. 本時の課題をつかむ。</b> 体の調子が悪いとき、どうやったら治った経験がありますか。 ・よく寝た。 ・栄養のあるものを食べた。 ・薬を飲んで寝た。 ・病院に行った。(注射や点滴してもらった。薬をもらった。) 治療をしなくても治ったのはなぜだと思いますか。 ・人間の体は、ある程度のけがや病気になる、自然に治すことができるようになっていく。</p>	<p><b>薬学部教員(薬剤師)</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自然治癒力と薬などの力によるものに分けて板書する。</li> <li>・病気やけがを自分で乗り切るために、本来人間がもっている力を「自然治癒力」と言い、病気やけがから回復するときに働くことを説明する。</li> <li>・「自然治癒力」はあるが、強い病原体が入ったときや病気がこれ以上悪くなるのをおさえるためには「薬」の力が必要であることから、「薬」は「自然治癒力」を助け、病気やけがが早く治るようにしたり、重くならないようにしてくれるものであることを確認する。</li> </ul>	<p>・スライド(パワーポイント使用)</p>
展開 前半 40分	<p><b>2. めあてを確認する。</b> 医薬品を使うとき、気をつけることは何だろう。</p> <p><b>3. 薬の外箱から、使用するとき気を付けることを見つける。</b> 薬の外箱には、どんなこと(項目と用法・用量の内容のみ)が書かれているか調べてみよう。 ・ワークシートへ記入する。 書かれていたことを発表しよう。 ・用法・用量・成分・効能・効果 ・使用上の注意 みなさんの外箱の「用法」には、何と書かれていましたか。 ・ぼくのは、1日3回食後と書いてある。 ・わたしのは、1日2回食後と書いてある。</p>	<p><b>薬学部教員(薬剤師)</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ワークシートを配布する。</li> <li>・薬の外箱を机に出させる。もしくは配布する。</li> <li>・ワークシートには、あらかじめ「用法・用量」を例示しておき、どのように記入するとよいかわかるようにしておく。また、「用法・用量」のみ、具体的な記載内容を記入できる枠を作っておく。</li> <li>・薬の外箱には様々な情報が書かれていることに気づかせる。</li> <li>・何人が指名して発表させることで、薬によって用法が違うことに気づかせ、なぜ違うのか興味関心を引き出す。</li> </ul>	<p>・ワークシート ・薬の外箱 各自1つあたるように準備する。</p> <p><u>インターネットで「くすりの適正使用協議会」と検索すると使用できる資料があります。</u></p>
展開 後半 40分	<p><b>4. なぜ、このようなことが決められているのか、説明する。</b></p> <p>実験1「ベタベタ実験」は生徒にも体験してもらおう</p> <p>×クイズでは、生徒に挙手してもらおう。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・外箱よりも説明書にはさらに詳しい内容が記載されていることを確認する。</li> <li>・マグネパネル「薬の運ばれ方」では血液の流れとともに薬が運ばれていくこと、マグネパネル「薬の血中濃度」では、薬の効き目は「体の中の薬の量(血中濃度)」で決まること、「薬の効き目が現れる範囲」を保つために、使用回数や使用時間、使用量が決められていることを話す。その中で主作用と副作用についておさえていく。</li> <li>・お薬を飲むときにはコップ一杯程度の水で飲むについて、実験1「ベタベタ実験」、実験2「飲み合わせ実験/ジュース実験」で確認する。(学生が担当)</li> <li>・×クイズを5問行い、他にも気をつけるべきことを話す。(学生が担当)</li> </ul>	<p>・マグネパネル「薬の運ばれ方」 ・マグネパネル「薬の血中濃度」</p>
終末 10分	<p><b>5. 本時の学習を振り返り、わかったことをワークシートにまとめる。</b> ワークシートに振り返りを書きましょう。 書いたことを発表しましょう。 ・「今まで薬を使うときにあまり考えずに飲んでいただけ、これからは正しく使えるようにしていきたい。」</p>	<p><b>薬学部教員(薬剤師)</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・数名指名して、次のことをおさえる。</li> <li>・医薬品は人間にとって有用なものであるが、 医薬品には主作用と副作用がある 医薬品には、使用回数、使用時間、使用量などの使用方法がある 正しく使用する必要がある また、次の点についても確認しておく。 中学生は、自分の判断で使用しないで、必ず、おうちの人に相談する 薬局では、「薬剤師さん」が相談にのってくれる(かかりつけ薬剤師)</li> </ul>	<p>・ワークシートにまとめる</p>